

つながる、私と地域と世界の課題

捨てられたビニールは学校給食になるか?
佐賀農業高校インターナショナル部

奄美大島
協力隊 I ターンの多い美しい島

私はダイヤモンドを買いたくない、でもそれでいいの?
志布志高校ESSクラブ

世界をつなぐ写真展
イオン八幡東ショッピングセンター 2/14~22開催

JICA九州ネット

jqn

第5号

特集 国際協力推進員

Clouds



つながる! 私と地域と世界の課題

第1回

第3回



「甘酒キャンディに魅せられて」
というのは僕だけ?みんなは「つながり」
を求めてここへ集まってきた。



「反逆児?」
時間です!という呼び掛けにも従わず、
自分の課題、取組みたいことを発表し
続けた Sさん、Kさん、Dさん、大好きです。
彼らは反逆児になり得るのか。



「いろいろな色」
赤+青=紫、黄色+赤はオレンジ、では
教育+環境+コンフリクト+大学生+
ファシリテーション+国際交流+多文化共生
+福祉+ボランティア+農業は?



「キョンシーズ15」
怪しい、絶対に怪しい。でもこれはれっきとした学習会の1コマです。目隠しをして前の人々の肩に手をのせて、廣瀬さんの指導で階段や広場を歩きました。見るという感覚を遮断され…ソノ先に見えたのは何?



「虫の逆襲 ~世界の縮図in北九州~」
嘘です。すみません。これは第3回のフィールドワークの時、I君が創った「毛虫の行列」です。広場にある落ち葉や小枝など、あるものを自由に使った「表現活動」。自分の頭、指、肌、鼻、足、目、耳、心、すべてを使って地球と自分を感じました。感覚を研ぎ澄まして自分の持ち物を広く「感じろ!」



「廣瀬さんお願いします!」
自分の今後の活動についてアクションプランを作成しました。廣瀬さんに添削をお願いし、実行可能なプランを作成。廣瀬さんありがとうございます。百人力です。
でも、大事なのはこれからだ!



「地震じゃないです」
2008年12月7日(日)JICA九州を震源とする地震じゃない揺れが発生しました。この学習会の参加者はこれからどのように、この揺れを広げていくのか。アイディア、つながり、自信、熱意で第2波、第3波を打って出る。どこまで届くか。これから北九、別府が熱い。>>>つづく



広瀬敏通さん

第3回のゲストにお迎えした広瀬さんは、学生時代からインドの障害児自立のための体制作りや、カンボジア難民救済活動など様々な活動に取り組んできました。そして自然体験活動、環境教育の必要性を確信し、全国の自然学校のモデルとなったホールアース自然学校を創設しました。近年は農村と都市部をつなぐエコツーリズムに力を入れ、全国で活躍しています。今回の講演会では、「役割はだれにでも、色々な形であるものです。それを役立てるか否かは自分次第。みんなの役割と活かし方と一緒に考え、形にすることが私の役割です」と語ります。

ホールアース自然学校
<http://wens.gr.jp>



つながる、私と地域と世界の課題

■前のページを見て、「何の話だ?」と思った皆さん、こんにちは。国際協力推進員・大分県担当の椿大亮です。JICA九州では自分が考える「問題」とみんなの考える「問題」、そして世界が抱える問題の中に「つながり」を探る学習会「つながる、私と地域と世界の課題」を北九州と別府の2会場・全4回で開催しています。

集まった参加者のバックグラウンドは様々…この会で何が生まれるのか。何も生まれないのか。

北九州と別府でひっそりと始まったこの学習会は、まずは自分を見つめ、地域や世界を見つめ、みんなとつながり、自分達で見つけた課題を解決していくこうということを目的としています。自分を変える、地域を変える、日本を変える、世界を変える…「そんなことできるの?」「無理でしょ…」。さまざま声が聞こえそうだ。う~ん、無理かも。でもネガティブになつたらそれで終わりでしょ?自分自身で可能性を閉ざすのはかっこ悪い。だからその可能性をみんなと考えたい、そんな人たちが集まりました。第1回学習会では自分自身の課題と向き合い、第2回ではそれを発表し、みんなの意見をもらう。そして同じ興味関心を持つ人とグループになって、課題を見つけ解決法を考えました。そして第3回の北九・大分合同勉強会には、ホールアース自然学校の広瀬敏通氏をお迎えし、フィールドアクティヴィティ、アクションプラン作成を行いました。

捨てられたビニールは学校給食になるか？

佐賀農業高校インターナショナル部

■高校生国際協力実体験プログラムのその後

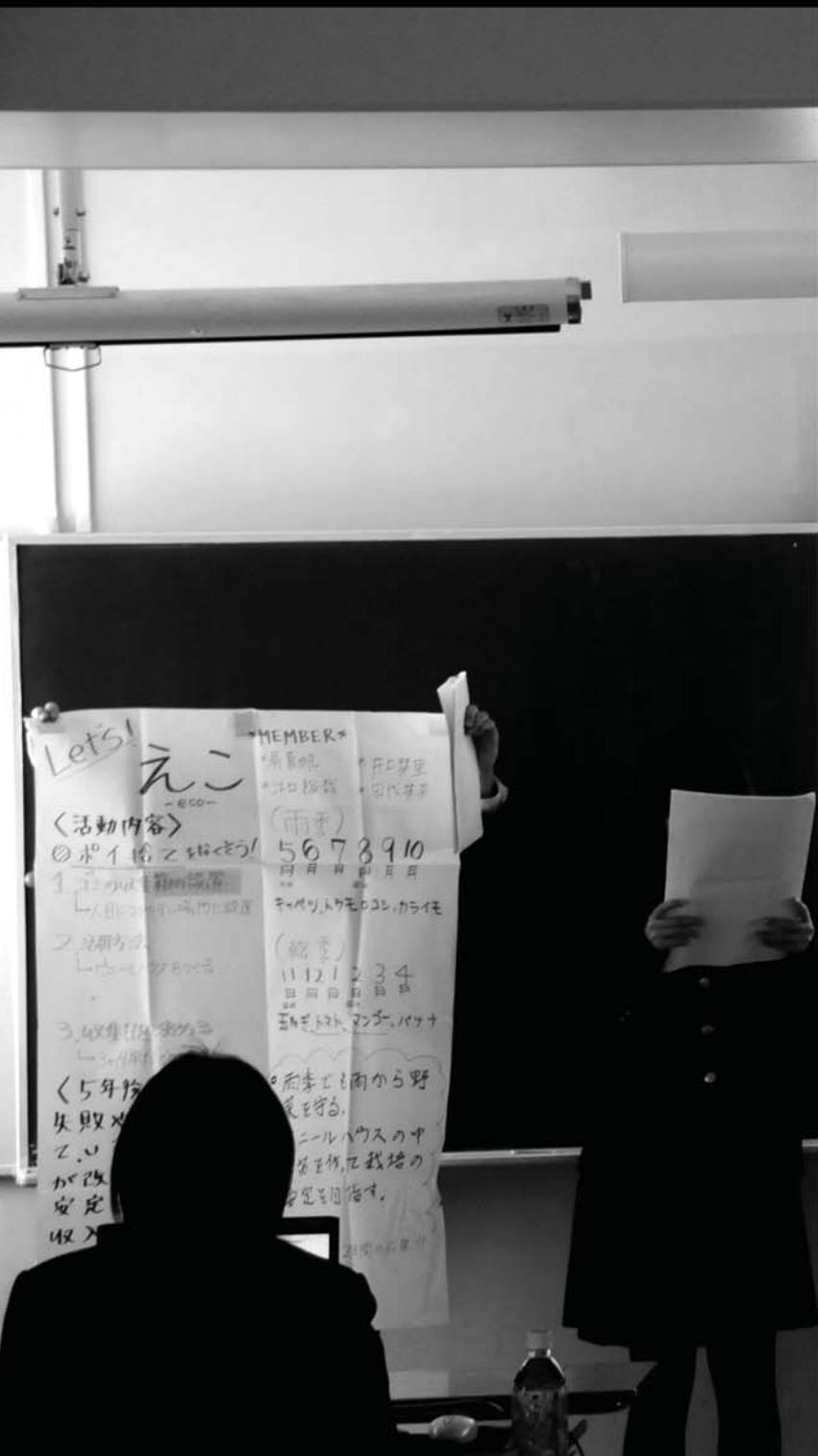
この夏、JICA九州では「高校生国際協力実体験プログラム」が開催されました。高校生が国際協力について考える、泊り込みのイベントです。このプログラムには九州各地から16校、75名の生徒が参加しました。そして、このイベント後も「国際協力」について考え続けている学校があります。その一つ、佐賀県立農業高等学校インターナショナル部は、実体験プログラムで経験したことを整理し、自分達が考えた「国際協力の在り方」について高等学校国際教育研究会秋季発表会で発表しました。彼らの取組みを紹介します。

■Let's えこプロジェクト ポイ捨てビニールを回収せよ

肌寒い小雨の日、佐賀農業の視聴覚室には、部員5名と先生方の声が飛び交います。「Let's えこ」プログラムをもう一度見直す話し合いが行われているのです。このプロジェクトは、夏の実体験プログラムで行われた、実際に青年海外協力隊員としてアフリカ・ブルキナファソのバンゾン村に赴任したと仮定して支援プロジェクト作

成に取り組むカリキュラムで作られた企画です。ポイ捨てされているビニールを回収し、それらを元にビニールハウスを建設するというものです。回収作業により周囲の環境を清掃し、ビニールハウスで一年を通して野菜を収穫する、さらにその収益によって学校給食を提供するという計画です。彼らはこの計画を、事前に顧問の堤先生を中心に行ったワークショップ「援助する前に考え方」によって発案された評価基準をもって再度、検討しました。その評価基準とは、1.お金の使い方は適当か 2.村人にとって本当に必要か 3.村人たちの意見を尊重できているか 4.村人とコミュニケーションがとれているか 5.全体の利益になっているかというものです。この5つの点に着目し、このプロジェクトのよい点と不十分な点を検証した結果、よい点として1.ゴミだったビニールを再利用している点 2.子供の給食のことを考えている点 3.その土地の産業を発展させようとしている点が出てきました。不十分な点としては1.今まで捨てていたビニールを集めることの利点の説明が不十分 >>> つづく





2.ゴミを集めるとか考へ方がないのでゴミの正しい捨て方の説明や知識が必要 3.雨季は出稼ぎに都市に出る人もいるかもしれない、まずは半分の人から試しに野菜づくりを始める 4.ビニールを使って縄跳びをしていた子どもたちの遊び道具がなくなるので、遊びを増やす 5.自分の意見を押し付けるのは難しいため、まずは、村の人たちと何でも話せるようになるまで仲良くなる、となりました。自分達が考え出した計画を、みんなで話しあった基準で評価して、よりよい物にしよう、というこの検証をもとにした発表で高校生国際教育研究会秋季発表会に臨んだ彼らは、優秀賞を受賞しました。

高校生国際協力実体験プログラムから3ヶ月間、佐賀農業高校インターナショナル部は国際協力というテーマを様々な方向から考える活動を続け、国際協力における人と人との関係性の重要性、そして援助を受ける側の視点の必要性を、彼らなりの国際協力の在り方として見出しました。今後の佐賀農業高等学校インターナショナル部の皆さんのお躍に期待します。



■高校生国際協力実体験プログラムのその後

高校生達が発表する間、聴衆は彼女達が調べたシェラレオネの現状とその惨状に引き込まれ、一体なぜその惨状が起きているのか、そして自分たちには何ができるのかを考えているようでした。

この夏、JICA九州で開催された高校生のための国際協力を考えるイベント「高校生国際協力実体験プログラム」に参加した鹿児島県立志布志高等学校ESSクラブの生徒はプログラム終了後、自分達の学校に戻り、調べ学習を続けました。そして、その成果を11月30日、かごしま県民交流センターで催された「国際交流フェスティバル」の中で発表したのです。

■もっと知りたいという気持ち

8月6日から2日間の日程で九州各县から参加した6校、37名の生徒と一緒にプログラムを受け、寝食を共にし、援助とは何か?を考えました。また、実際に青年海外協力隊員の村落開発普及員として2年間、アフリカ、ブルキナファソのバンゾン村に赴任したと仮定して、現地での支援プロジェクト作成に取り組みました。そんな彼女達は研修を終えた感想を以下のように語っています。「学校に帰ってきて何より感じたことがあります。それは世界の現状をもっと知りたいと思ったことです。JICAのプログラムに参加する前はブルキナファソ、バンゾン村なんて全く知りませんでした。世界には今色々な問題や解決しないといけない事がたくさんあります。協力したいと思っていても世界の事をもっと知らなければならない、世界の困っている人たちの事をもっと知りたいと感じるようになったのです」。もっと知りたいという気持ちを持った彼女達は、夏の実体験プログラムから帰ってから、同行した先生の勧めで、映画「ブラッドダイヤモンド」を鑑賞し、「ダイヤモンドより平和をください」という本を読みました。>>>つづく



写真:シェラレオネの子供達 撮影:小野雅裕さん 元JICAジュニア専門員

私達はダイヤモンドを買いたくない
本当にそれでいいの？



写真:シェラレオネの子供達 撮影:小野雅裕さん 元JICAジュニア専門員

■シェラレオネとダイヤモンド

彼女達は映画と本の舞台となるアフリカのシェラレオネという国について知り、政府とRUF(反政府革命統一戦線)の対立について知ります。反政府組織に依存させるために手足を切断して自由を奪い、両親を殺して孤児となった子どもを、麻薬を使って少年兵に変え、その少年兵に村人を殺させ、その手足を切断させるという、思わず目を背けたくなる現実がありました。そして、その惨劇の向こうに彼女達は紛争ダイヤモンドの存在を知ることになります。彼女達は言います。

「本当にダイヤモンドは必要なのか？という疑問が湧いてきました。とてもきれいなダイヤモンドですがとても悲惨な現状、そして私達が知らずに買ってしまったものが紛争の武器になっていると考えるととても耐えられなくなりました。さらにダイヤモンドを欲しいとは思わなくなりました。そこでさらに調べてみました」。紛争ダイヤモンドを防ぐためにどのような事がなされているか？私達、消費者は何をすべきか？

紛争ダイヤモンドを規制する法律

ダイヤモンド業界の自主規制

彼女達は更に調べます。

ダイヤモンド産業の努力

規制のための、キンバリー・プロセスやトラッキングシステム

「私達はダイヤモンドは買いたくない、映画や本を観た後ではそう思う。けれど本当にそれでいいの？」

彼女達はダイヤモンド産業の社会貢献についても調べます。

ダイヤモンドの収益により、ボツワナでは13歳までの子どもが無料で学校に通っていること。ダイヤモンドの収益によるインフラの整備。彼女達は収益がアフリカの国々に役立っており、発展にも寄与していることを知ります。調べ学習を続ける彼女たちは、自分達にできることを見つけていきます。誰かにそう言わされたからではなく、自分たちで考えて行動できることを。自分たちで考え、行動する。言うのは簡単ですが、彼女達のようにしっかりと考えてダイヤモンドを買う人が増えれば、世界の紛争を減らすことに繋がります。私たちができる国際協力は思いがけないところにあったりします。

国際協力推進員 鹿児島県担当

清水 卓朗

国際理解教育・海外ボランティア、ご相談ください。

jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp



今回発表を行った志布志高校の皆さん

奄美大島

協力隊Ⅰ ターンの多い美しい島



第1歩

鹿児島空港から約一時間。人口約6800人、佐渡島に次いで大きいこの島は、東洋のガラパゴスと呼ばれています。この美しい島で、「世界に3歩、近づこう」というイベントが行われました。10月12日の日曜日、「世界に近づく3歩」の第1歩はエジプト料理教室。青年海外協力隊員としてエジプトで保育士として活動した戸川美子さんと一緒に、ラハマビバターティスという肉ジャガ?のようなものと、ロッズとよばれるご飯、そしてモロヘイヤのスープ作りに取組みました。実はこのモロヘイヤスープがクセモノでした。前日に島に入ったスタッフ一行はモロヘイヤを探し求めましたが、どこにもないのです。それもそのはず、この島では「はんだま」と呼ばれる、葉の裏側が鮮やかな紫色の地元野菜が見なおされていて、モロヘイヤが売っていないのです。そこでこの「はんだま」でエジプト風スープをつくれないかと試作をすることに。しかし試作は大失敗。どうしても独特の青臭さが残ってしまいます。明日は大丈夫かと心配になるスタッフたち。そこに奄美大島に1ターンで移り住んだ協力隊OGの一言。「うちでは酢を入れて調理してるよ」なるほど、酸味だ!ということで、当日はレモンを入れて調理したところ、大成功!とても素敵な、奄美大島とエジプトのコラボレーションスープができました。(レシピをつけていますので、ぜひみなさん作ってみてくださいね。)この様子は新聞やラジオでも取り上げてもらいました。

第2歩

2歩目は国際理解ワークショップ。戸川さんが現地で撮影した、ベールをかぶった女性たちの写真を見ながら、エジプトについて考えます。実は2枚とも同じこと(戸川さんのセミナーを受けている)をしているのですが、格好が全くちがいます。1枚は全員黒い服で眼だけをしている女性たち、もう1枚は明るい服を着ている女性たちです。この違いはなぜ?というのが切り口となり、活発な意見が出てきました。

第3歩

3歩目は世界に向けて自分から行動にでるとはどういうことか?その選択肢の一つである青年海外協力隊に行くにはどうしたらいいのか?募集説明会です。真剣に聞いてくださいた皆さんありがとうございました。
地元の皆さんはもちろんのこと、この開催を知った元青年海外協力隊員や元シニア海外ボランティアたちも次々駆け付けてください、イベントは大成功に終わりました。この島にはたくさんの協力隊OBが移り住んでいます。大自然やゆったりとした時間の流れに魅了された入たちは、口を揃えて奄美大島の素晴らしいを語ります。お酒の席では島料理が並び、三線の音が聞こえると、唄ったり踊ったり…、いつの間にか知らない人でも仲良くなってしまうこの感覚は、それぞれに協力隊時代をすごした、どこかの国を彷彿させているのでしょうか。

国際交流イバント・海外ボランティア お気軽にご相談ください。

国際協力推進員 北九州担当 高田順子 jicadpd-desk-kitakyushushi@jica.go.jp

国際協力推進員 鹿児島担当 清水卓朗 jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp



エジプト風はんだまスープ

■材料：

バター20g　にんにく1片　玉ねぎ小1つ　レモン汁少々
水400ml　はんだま　茎から葉をとって20枚くらい
塩こしょう適量　コンソメ小さじ4杯

■作り方：

1. はんだまの葉を茎から取り、レモンを入れた湯で軽く茹で、ミキサーで混ぜる。
2. 鍋にバターを入れ、みじん切りにした玉ねぎとにんにくを炒め、火が通ったら水とスープで煮込む。
3. 1のはんだまを加え、塩こしょうで味を調える。





世界をつなぐ写真展
イソハ幡東ショッピングセンター
2/14～2/22

詳しくはJICA九州ホームページ・イベント情報をご覧ください。

JICAとKOICA、共同研修

JICA九州と韓国外交通商部の開発途上国向け政府開発援助(ODA)の技術協力や無償資金協力の実施機関、韓国国際協力団(KOICA)は、日韓共同の研修を実施しました。中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ミャンマー、ラオスから研修員を迎え、「大気保全管理」「東アジア 環境・省エネルギー政策と技術」研修を行われました。

■国境を越えた地域全体の課題

アジア地域の多くの国々では、大気・水質汚染やエネルギーの非効率的な利用が問題となっています。環境行政に対する十分な知識や経験がないことが一因と考えられています。環境管理が不十分な状況は、日本や韓国を含む東アジア全域の課題となり、地球温暖化問題を加速させる一つの要因ともなっています。上記の2コースでは、東アジア各国で環境管理に関わっている研修員が日本と韓国を訪問し、ソウルの環境管理行政、また、環境モデル都市にも選ばれた北九州市の公害の歴史や政策を学ぶことで、東アジア地域の環境管理分野の人材育成、国を超えたネットワークづくりを目指しています。



■写真はラオスの研修員からいただいたお土産です。JICA九州では、様々な国のお土産品や民族衣装などをイベントや教育現場に貸出しています。詳しくは下記、問合せ先まで。